

	質問	回答
1	道田先生に質問です。最近、時間が経つと土に還るタイプのバイオプラスチック商品がいろいろ紹介されていると思います。これらは海洋汚染問題、マイクロプラスチック問題の解決策としてはどうでしょうか？動物が食べた時にどうなるのかも気になります	材料科学は専門ではないので、自身の現在の知識に基づく個人的意見としてお答えします。生分解性プラスチックの持っている可能性は大きいとは思いますが、広く展開する前に、分解の中間生成物の性質や振舞いを含め、分解過程での環境影響等についてよく調べたほうがよいと思います。（道田）
2	二次マイクロプラスチックやレジンペレットには有毒なもの（毒素・有害分子）を取込むスポンジというような機能があるとも聞いたことが有ります。これを逆手にとって海洋フィルターののような事業として海の汚れやゴミを綺麗にろ過するプラントなどの建設の取り組みはありますか？	私の知る限り、そうしたものはないと思います。（道田）
3	これを逆手にとって海洋フィルターののような事業として海の汚れやゴミを綺麗にろ過するプラントなどの建設の取り組みはありますか？	同上
4	これだけ世界的に負の影響があるので、プラスチックを生産している会社に課税し、そのお金を使って海洋ゴミの回収をするということとはできないのでしょうか？プラスチック製品が安すぎると思います。	温暖化対策のためのいわゆる炭素税と同様の考えですね。検討する価値はあると思います。制度設計までには多くの検討課題があると考えられます。例えば、プラスチックの原料である石油にはすでに炭素税が課せられていることとの税負担の考え方の整理、リサイクルされたものへの課税の考え方、製品価格に転嫁された税の負担の公平性（CO2と同じようにここでも南北問題）等々、多岐にわたります。プラスチックが極めて安価であることがリサイクル上の課題の要因の一つであることはそのとおりです。（道田）

5	マイクロプラスチックの研究については各国で連携されているのでしょうか？一国の力で行うには資本的にも限界があり連携が望ましいと思います。	講演で一端をお示した通り連携は急速に進んでいます。国際政治上の大きな課題になると、国際的取り組みが進みやすくなる半面、場合によっては、各国および関係ステークホルダーの様々な思惑をからめた議論が展開されるようになる可能性も高く、合意形成をかえって難しくする懸念も高まる気がします。（道田）
6	道田先生に質問です。現状の法律や国際的な枠組みで、例えばA国で排出され、B国の沿岸に流れ着いた海洋ゴミの排出責任をA国に問う事のできるような仕組みはありますか？	基本的には、流れ着いた側において処理することになっているはずです。ただし、2011年の震災起源の漂流物が北米等に漂着した際は、日本も一定の負担をして処理や対策をしました。そうした例もあります。（道田）
7	道田先生に質問です。日本の沿岸に流れ着いた海洋ゴミは、廃棄物の法律では、一般廃棄物として地方自治体にて処理されるのでしょうか。	海岸管理者（多くの場合都道府県）が処理の責任を負うことになっています。ただ、海岸管理者にとって負担が大きいので、処理費用等の一部を国が補助する仕組みもあります。（道田）
8	道田先生に質問です。日本の沿岸に流れ着いた海洋ゴミは、廃棄物の法律では、一般廃棄物として地方自治体にて処理されるのでしょうか。	同上
9	浦田先生に質問です。能登地区全体の何パーセントの小学校がこの取り組みをされているのでしょうか？海岸線に隣接した小学校のみですか？全域でしょうか？	2年前の羽咋市の場合、全5小学校のうち、海に直接関わる環境教育を行なっているのは海岸部の2校のみでした。能登全体で30～40パーセントくらいではないかと思いますが、あくまで感覚的な予想で、正確に調べたデータはいにく手元にありません。
10	道田先生へ 洗剤の香り成分はマイクロプラスチックに包まれている？本当でしょうか？	私の知る範囲では、素材はさまざまです。いわゆるプラスチックもありますし、ゼラチンなど天然原料から作られたものもあるようです。（道田）

11	取れる貝類、回遊している魚も変わってきているのでしょうか？	ここ5年で見れば、能登の里海では鰯とヒラマサのハイブリッドのような魚が急に増えていること。これまで見ないカジキマグロやジンベエサメの出現を目撃した海女もいた。輪島ではまだ確認できてないが、ヒョウモンダコは何年か前に金沢で海女が確認したこともある。貝類の種類はあまり変わっていないが、ここ20年で劇的に減っており、特にこの5年はマタカ鮑が急に減った。また海が透明度が悪くなって暗い感じで、深いトコに生息しているマタカ鮑を獲るのも難しくなった。（早瀬）
----	--------------------------------------	---



UNITED NATIONS
UNIVERSITY

UNU-IAS

Institute for the Advanced Study
of Sustainability

国連大学OUIK Webinar

里海の保全から考えるSDG14の達成 ー海洋汚染問題を考えるー

2020年6月6日(土) 13:30～

主催：
国連大学サステナビリティ
高等研究所 いしかわ・かなざわ
オペレーティング・ユニット
(国連大学OUIK)

共催：
石川県、「能登の里山里海」
世界農業遺産活用実行委員会

定員：500名

参加費：無料



参加申込：

- ・このイベントはオンライン開催のとなります。
- ・参加をご希望の方は上記のQRコード、もしくは
<http://ouik.unu.edu/events/3114> よりご登録ください。
(県民大学校の講座として受講する方も事前登録が必要です)
- ・登録後、当日アクセスしていただくとイベントに参加できるURL付きの
招待メールが届きます。
- ・メールが届かない場合などは unu-iasouik@unu.edu にご連絡ください。

今回の国連大学OUIK「能登の里海セミナー」は、国連が定めた6月8日の世界海洋デーを記念し、SDG14「海の豊かさを守ろう」の10個の目標から、SDG14.1「2025年までに、陸上活動による海洋堆積物や富栄養化をはじめ、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、大幅に減少させる。」について勉強しながら、海に想いを馳せるイベントです。近年、国内外において関心が高まっている海洋プラスチックゴミ問題や、経済活動による汚染への対策など、海洋汚染の状況について勉強するとともに、海洋環境の保護のために私たちができることについて、国内そして能登地域の専門家の方々と共に議論します。また、今回の講座は「石川県民大学校」の講座としても特別実施いたします。

プログラム

司会：国連大学OUIK事務局長 永井三岐子 氏

13:30-13:35 開会挨拶 国連大学OUIK事務局長 永井三岐子 氏

13:35-13:50 セミナー紹介「能登の里海ムーブメントとSDG14について」 国連大学OUIK研究員 イヴォーン・ユー 氏

13:50-14:25 【基調講義】「海洋プラスチックごみをめぐる課題」 東京大学大気海洋研究所教授 道田豊 氏

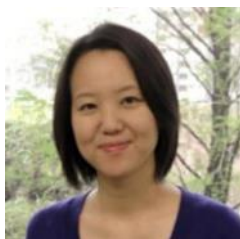
14:25-14:45 【活動紹介】「子供たちの海の学びを考える・能登里海教育研究所の環境教育」
一般社団法人能登里海教育研究所主幹研究員 浦田慎 氏

14:45-15:25 【パネルディスカッション】「SDG14.1海洋汚染軽減の目標達成に私たちのできること」
モデレーター：イヴォーン・ユー
パネリスト：輪島の海女漁保存振興会海女 早瀬千春氏、道田豊氏、浦田慎氏

17:25-17:30 閉会挨拶 国連大学OUIK所長 渡辺綱男 氏

スピーカープロフィール（登壇順）

イヴォーン・ユー



シンガポール出身、農学博士（東京大学）、専門は国際水産開発学。初来日の2001年に以降は、宮崎県、シンガポール国家交通省などの勤務を経て、2012年から現職。日本や韓国の世界農業遺産の申請活動を支援するとともに、国連大学の「SATOYAMAイニシアティブ」と「能登の里海ムーブメント」活動にも取り込み、里山と里海の持続可能な発展や、生態系サービスと生物多様性保全を研究。2014年から「能登の里海セミナー」を企画し、里海の研究と保全活動について国内外へ発信。

道田豊



1958年広島市生まれ、62歳。専門は海洋物理学、海洋政策、博士（理学）。1981年東京大学理学部卒、83年同修士課程修了、84年海上保安庁水路部、2000年東京大学海洋研究所助教授、07年教授、10年国際連携研究センター教授、11年東京大学総長補佐、15-19年大気海洋研究所副所長。長年、ユネスコ政府間海洋学委員会（IOC）の活動に関わり、11-15年同委員会副議長、15-19年は同委員会「国際海洋データ情報交換（IODE）」共同議長、これら実績により、15年第8回海洋立国推進功労者表彰（内閣総理大臣賞）。2019年から、日本財団-東京大学FSI基金による「海洋プラスチックごみ対策研究」プロジェクトで研究代表者。

浦田慎



1974年金沢市生まれ。理学博士。金沢二水高校、金沢大学卒、大阪大学研究員、広島大学助教を経て現職。研究分野は海洋動物の生態、発生、多様性などで、潜水からDNA解析まで幅広く行う。また里海文化をキーワードとして海洋教育に携わり、地域産業史、近代物流史に関わる著作がある。県内外の学校教育現場での海洋教育実践・支援を通じてその課題を明らかにし、より効果的な教育プログラムの構築に取り組んでいる。

早瀬千春



高校時代の夏休みを含めて35年間海女漁を専業生業にしてきた。夏はアワビ、サザエ、エゴリ、モズク漁を行い、11月から4月の半ばまではナマコ、途中の1月には岩海苔や亀の手を採り、4月半ばからは天然ワカメ漁、6月半からはモズクやツルモも採るなど、1年の内、11か月輪島の海を舞台に仕事する毎日を送っている（10月ひと月だけ海女漁休み）。また、4年前に他界した母親の後を継ぎ、海女用ウェットスーツ製造を営む。最近は新型コロナウイルス影響を受け、一部の休漁が続いている中、ウェットスーツの材質で製造した「アマノマスク」は好評につき話題に。長女も昨年から海女漁をデビューし、親子で400年以上の歴史があり、国の重要無形民俗文化財にも指定されている「輪島の海女漁の技術」を継承。